幼児保育･介護福祉･看護　３学科合同「地域ボランティア演習」の成果と課題

Results and Issues Observed from Local Volunteer Exercises
Involving the Departments of Childcare, Care Work, and Nursing

合津　千香　Chika GOZU
保高　一仁　Kazuhito HOTAKA
春日　仁子　Jinko KASUGA
横山　芳子　Yoshiko YOKOYAMA

要旨

本学では建学の精神に「地域貢献」を掲げ、地域の人々のニーズに応えることができる保育士･介護福祉士･看護師のケアスペシャリストを養成している。平成 26 年度から初めての３学科合同授業である「地域ボランティア演習」を開講し、短大の立地する笹賀地区における地域活動に参加し、多くの学びを得た。本稿では、その授業内容を整理し、授業終了時の学生アンケートをもとに本科目の成果と課題について考察した。その結果として①３学科の学生が地域の一員として地域福祉活動に参加することで、人々のつながりや地域に対する人々の思いや活動の実際を知り、地域の活動に参加したいという意欲が生まれた。さらに、地域課題やその背景を考える学習への発展が望まれる。②様々な年齢、状況の人たちとの出会いは、ケアスペシャリストとしてのコミュニケーション能力を高める場となった。関わりをとおして、専門職として対象とする人を発達や生活歴や地域での暮らしとの関係で理解することが期待できる。③ともに活動する中で、自分の専門職としての学びを自覚するとともに、他の学科の専門性を認めて協働することができた。さらに、他職種との連携を体感できる機会として意図的に授業を組み立てていく必要がある。④教員間の連携や地域の事業所・機関・団体との連携・協働をすすめ、さらに学生の専門性や自主性を引き出すための学習内容の工夫が必要である。⑤ケアスペシャリストを目指す上でプラスとなる豊かな体験を短大全体に波及させる方策を考えていく必要がある。という５点が示唆された。

【キーワード】　地域ボランティア演習　幼児保育　介護福祉　看護　３学科合同

はじめに

本学では、幼児保育学科、介護福祉学科、看護学科でそれぞれケアスペシャリストの養成教育を行っている。これまで、３学科がともに学び合う合同授業の必要性はいわれてきたが、それぞれの国家資格取得のための専門科目のカリキュラムは過密であり、実現してこなかった。「地域ボランティア演習」は、選択科目ではあるが、初めての３学科合同授業として平成 26 年度から開講された。

ボランティア関係の科目を設置し、活動に対して単位認定をしている大学・短大は全国に相当数あり[1)]、さまざまな形態で授業を展開している[2) 3)]。また、ボランティアを単位に組み込むことの賛否には議論のあるところではある[4)]。しかし、ここでは人を支える専門職をめざす３学科の学生が、幼児保育、介護福祉、看護の専門性を活かし合い、共に地域を知り、地域から学ぶことの意義は大きいと考え、その実施体制、活動内容、学生の学びを整理し、成果と課題を明らかにする。

１．３学科合同授業の開講

本学と笹賀地区の結びつきは、本学が昭和 47 年に笹賀地区の人たちにゆかりの深い「松本市立笹賀小学校」の跡地に開学されたことから始まる。これまで、松本市制 100 周年記念イベント、地区防災訓練などを協働で実施してきている。学科としては、幼児保育学科、看護学科が学科単独の選択科目として「地域ボランティア演習」を開講し、笹賀地区の「ふれあい会食会」に参加するなどを行い、また、介護福祉学科は必修科目「生活交流演習」の中で「笹賀めぐり」や地域の福祉活動実践者や高齢者との交流などを行ってきた[5)]。しかし、残念ながらそれぞれが単発であったり、一部の担当者との関係であったり、笹賀地区と短大としての実質的な連携・協働とは言いがたかった。

本学では建学の精神、教育理念、教育目標において「地域の人々への貢献」を謳っており、各学科の教育目標でも、地域との関係を位置づけている。幼児保育学科では、「相互の信頼関係を築いて、地域の人々や家族がかかえる現実の育児課題に応えられるよう、人間関係調整力を養う。」としており、介護福祉学科では、「他職種と連携・協働するとともに地域住民に貢献できる介護福祉士の養成」を挙げている。看護学科では「看護専門職者としての視野の拡大と地域特性を見極めた看護提供のできる教育」を挙げ、「看護と福祉の連携・協働ができる看

護師」「地域に根ざした看護師」を養成するとしている。

平成26年度に地域貢献・地域交流活動の企画・推進を担う学内の特別委員会として「地域交流推進委員会」がスタートをきり、本学と長野県東筑摩郡筑北村との連携協定事業「ちくほくプラス」によるさまざまな交流が開始された。さらに、こうした交流活動を地元の笹賀地区でも展開していくことが模索されていた。

一方、同年に笹賀地区では、行政と地域住民の協働からなる「笹賀地区福祉の地域づくり協議会」が発足し、重点課題である「高齢者・一人暮らし・要援護者を支える地域づくり」を実現するために「松本短大との連携」が位置づけられ、地域住民からの福祉・防災面での連携・協働を望む声はますます大きくなってきている状況である。

こうした中で、平成26年度前期3学科合同授業「地域ボランティア演習」が開講されることになった。授業はこれまでに、学科の「地域ボランティア演習」や笹賀地区と関わりのあった教員4人が担当することとなり、幼児保育学科2年生、介護福祉学科1年生、看護学科1年生が履修できる選択科目として、木曜日の5限目に設定された。「地域ボランティア演習」の授業の目的は、「実践をつうじて『ケアスペシャリスト』としての自覚を育み、各々の教育課程における専門性を意識する。幼児保育、介護福祉、看護の3学科の協働を通じて、それぞれの領域に対する理解を深め、チームとして地域社会に貢献する。」とした。

2．授業展開の実際

「地域ボランティア演習」を履修したのは、幼児保育学科2年生17人、介護福祉学科1年生18人、看護学科1年生23人で合計58人であった。履修登録時に各学科の担当教員が科目の説明をしたことで予想以上の学生が履修することになった。そこで、3学科の学生で構成する10人ずつの活動グループを6グループ編成し、グループごとに異なる活動をしたり、ローテーションで実施したり、変則的な授業運営となった。15回の授業内容は、［表1］のとおりである。

［表1］「地域ボランティア演習」の授業内容

回数	テーマ	内　容
1	地域って何だろう	自分の地域で行われている活動をグループで話し合うことにより「地域」は単なる土地の範囲ではなく、治安・防犯・防災・環境保全・伝承文化の継承・冠婚葬祭・レクリエーション・情報の共有・生活の交流・助け合い・福祉・教育などの機能があり、それらは人と人とのつながりであることに気づく。
2	ボランティアって何？	自分の考えるボランティアについてグループで話し合い、ボランティアの定義を考える。グループで決めた定義を発表し、ボランティアにはいろいろな側面があることに気づく。
3 4	笹賀の文化と歴史 （パワーポイント ・校地内見学）	松本短大の校地は笹賀小学校跡地であることを知り、校地内の歌碑や「ささがおしどり桜」を見学する。笹賀地区の民話や歴史、松本短大体育館で平成21年度に実施した地区防災訓練の様子や地区で行われている地域福祉活動について知る。
5	グループホーム ひだまりの里訪問準備	認知症高齢者グループホームについての説明を聞き、訪問時の活動内容と役割分担を決め、準備を行う。
	グループホーム ひだまりの里　訪問	2グループがグループホームの2ユニットを訪問し、挨拶、ゲーム、歌、紙芝居、折り紙、坊主めくりなどで交流する。
6	災害の話・災害支援包装食について	＜日赤奉仕団笹賀分会　上條耕司団長＞ 東日本大震災や松本地震の例から、災害時の行動、備蓄物品、要援護者台帳、避難所の生活について知る。包装食の炊き方の説明を受け、グループごとに話し合う。
7	炊き出し訓練	＜日赤奉仕団笹賀分会の皆さん＞ グループごとに炊飯実習。学科の対象となる子ども、高齢者、病者に適した包装食について工夫し、試食し合う。

8	笹賀地区ふれあい会食会準備	履修生の半分にあたる３つのグループが参加することとし、会食会の概要を知り、役割の確認をする。テーブルに置くコマや花を折り紙で制作する。
9	笹賀地区ふれあい会食会参加 （土曜日開催３コマ分）	笹賀地区社協主催。独居・高齢者のみ世帯の高齢者の会食会を初めて松本短大体育館で開催。参加者 167 人（短大生含む）。 地区の町会長、民生委員、健康づくり推進員と一緒に、会場設営、参加者の案内、配膳、話し相手を担った。保育学生がピアノを弾き、介護学生は高齢者の介助や話し相手と体操の指導、看護学生は血圧測定を行う。会場が笹賀小学校跡地であり、懐かしいということで、初めて会食会に参加された方もいた。待合室となった食堂では、昔の校舎の写真などを映写した。
１０	ふれあい会食会　報告 次回活動準備	ふれあい会食会の写真を見ながら、グループごとに反省・感想を発表して、参加しなかった学生に対しても、体験を共有する。 次回の訪問先に応じた活動内容と役割分担を話し合う。
１１	グループホーム ひだまりの里訪問	第１回目に準備なしに訪問したグループが、今回は趣向を凝らした出し物やゲームで交流する。
	菅野学童クラブ訪問	ＮＰＯ松本学童クラブの会が運営する施設において、学童と交流を持つ。隣接する菅野小学校の体育館で、ドッジボール、オニごっこなど、身体を動かすレクリエーションで交流する。
	笹賀児童センター訪問	児童センターに登録をしている学童と、その日来館していた子どもたちと交流を持つ。学生が計画した紙飛行機作りや、ボール遊びのほか、センターが主催する夏祭りの準備に参加する。
１２	二美町２丁目町会夏祭り準備	ふれあい会食会に参加していない３つのグループが参加することとし、初めて参加する町会夏祭りの概要を知る。松短コーナーの出し物を決めて、ルールや必要物品について話し合う。模擬店の役割分担を決める。
１３	訪問活動報告会	前々回の訪問時の写真を見ながら、グループごとに反省・感想を発表して、参加しなかった学生に対しても、体験を共有する。
１４	二美町２丁目町会夏祭り参加 （土曜日開催３コマ分）	二美町２丁目町会主催。二美町２丁目公民館と駐車場において 13 の模擬店と６つのゲームコーナーに住民 250 人が集う。模擬店、ゲームコーナーの手伝いを行う。松短コーナーでは、お面をかぶったじゃんけんゲームが子どもたちで賑わった。
１５	夏祭り報告 全体まとめ	写真を見ながら、グループごとに反省・感想を発表して、参加しなかった学生に対しても、体験を共有する。 レポート課題と締め切りを提示する。アンケート実施。

３．研究方法

１）調査対象・調査期間

「地域ボランティア演習」を履修した幼児保育学科、介護福祉学科、看護学科の学生 59 人。

調査期間は、平成 26 年７月～８月である。

２）調査方法

最終回授業において無記名の自記式アンケートを配布し、調査の目的を説明し、協力を依頼した。

３）調査項目

(1) 印象に残った活動

(2) 学習前後での地域についての考え方の変化

(3) 地域の人についての印象

(4) 地域で行うボランティア活動についての考え

(5) 専門職をめざしていく上で役立つこと

(6) ３学科合同で良かった点、改善すべき点

４）倫理的配慮

回答は自由で、科目評価の対象とならないこと、回答しなかったことで不利益は生じないこと、個人は特定されない方法で処理することを説明し、回答することで調査について同意したものとした。尚、本研究は松本短期大学研究倫理委員会１４－０７号の承認を得ている。

4．アンケート結果

アンケート回収結果は幼児保育学科2年生16人、介護福祉学科1年16人、看護学科1年23人で合計55人であり、回収率は93.2%であった。

(1) 学生が印象に残った活動としては、[表2]のとおりであった。初めて認知症高齢者と接する機会となったひだまりの里の訪問、炊き出し訓練、そして大きなイベントへの参加となった笹賀地区ふれあい会食会と二美町2丁目町会夏祭りなどが多数を占めている。また、グループごとに事前準備をして臨んだ11回目の活動は、印象が強かったとみられる。

(2) 学習前後での地域についての考え方の変化は[表3]のように①「地域ごとにさまざまな活動をしていることを知った」「地域のつながりがとても大切だと考えが変わった」ことが多数で、②「地域について興味がでてきた、親しみを持った」③「地域の活動に参加して楽しかった」ことが続いている。体験を通して⑤「協力・連携の大切さ」や「自分たちは地域の力に支えられて生活している」と⑥「自分と地域の関係」に気づいている。

(3) 地域の人（笹賀で出会った人たち）についての印象としては［表4］のとおり①「みな温かい人だった」「初めて参加したのに、一員として温かく迎えてくれて嬉しかった」と地域の人とふれあい、②「みんな楽しそうに地域での活動をしていて、とても雰囲気が良かった」「一人一人が地域について真剣に考えて、積極的に参加していてすごいと思った」「一人暮らしの人でも地域活動に参加している人が多く楽しそうだった」と地域の人が地域活動に熱意をもち、楽しんでいる姿にふれている。

(4) 地域で行うボランティア活動についての考えは［表5］のとおり①「地域の人の交流の場であり、親しくなれる良い機会」「ただ手伝いにいくだけではなく、人と人とのつながりを作るための場」と考え、②「地域を活性化できる」「自分たちの地域を自分たちで良くしていこうとする活動は地域には不可欠」と住みよい地域づくりに繋がることに気づいている。そして「地域にでていくことで、多くの人と関わり、同じ活動をできたことで自分にプラスになった」と③「自分のためになる」という経験をし、④参加する人もボランティアもどちらも楽しんでいる姿にふれ、「自分も手伝うとか、ボランティアとかいうよりも、一つのことを楽しみながら協力してできて良かった」としている。さらに⑤「地域の子育て力が高まると思う」「防災訓練など地域の人が協力して、災害に備えている」など地域の課題解決へつながる地域活動の意味についても学んでいる。

さらに［表3］［表4］［表5］の中で、それぞれ「自分も積極的に参加したい」「もっと関わりたい」「自分も参加したい」という声が出ており、「最初は地域の活動をするのは面倒で大変だと思っていたけど、実際に色々なボランティアをしてみると思った以上に楽しかった」とやりがいや楽しさも経験し、「もっと笹賀の人と関わりたい」や「自分の地域での活動に参加したい」としている。

(5) 専門職をめざしていく上で役立つこととして［表6］のように、①「子ども」「高齢者」「患者さん」「地域の人」「違う立場の人」とのコミュニケーション力の向上を感じ、②保育現場、介護現場、看護現場での仕事のスキルアップに役立つだけでなく、実際に地域の人々との交流や行事、防災活動などを推進していく上でも役立つと考えている。また職場でボランティア受け入れ側となったときに「ボランティアとの関わり方に役立つ」という回答もあった。また③「違う立場の人と話すのはカンファレンスに役立つと思う」「地域の人とどのように関われば良いかがわかる」と他職種や地域の人との連携に役立つと考えている。そして④自分の専門分野の対象とする以外の幅広い年齢層の人たちと出会い、関わることで、その人にあった対応を身につけることができるとしている。さらに⑤人との関わりを大切にするという姿勢を学んだとしている。

(6) 3学科合同で良かった点、改善すべき点は［表7］のとおり①「学科を超えて一緒に学べて楽しかった」「先輩、後輩、先生と関われ、一緒に一つのことをやることで、距離が近くなった」との回答が多数を占め、活動の計画づくりや活動先での関わりなどで②「学科の専門を生かせた」「様々な意見を聞いたり、良い部分を出し合えた」としている。改善点としては、①授業運営上の問題として「予定がわかりにくかった」「授業外で連絡が取れず集まれなかった」「時間割の位置が悪い」「土曜日はスクールバスがなくて登校が大変」などの課題が挙げられた。②グループ活動上の課題として、「もっとほかの班の人とも話したかった」「もっと他学科の人といろんな話ができれば良かった」「リーダーを決めれば良かった」「同じ学科同士はよく話していたが、他学科が加わると話があまりなくなる」などがあげられた。

［表２］**印象に残った活動（複数回答）**

授業内容		３学科	幼保	介護	看護
1	地域って何だろう	1		1	
2	ボランティアって何？	1		1	
3	笹賀の文化と歴史	6	1	3	2
4	ボランティア準備	1	1		
5	グループホームひだまりの里　訪問	１８	7	7	4
6	災害の話・災害支援包装食について	1		1	
7	炊き出し訓練	２５	7	7	１１
8	笹賀地区ふれあい会食会　準備	1	1		
9	笹賀地区ふれあい会食会（①②③グループ参加）	１７	5	5	7
１０	会食会報告・ボランティア準備	1	1		
１１	ボランティア　参加　　（ひだまりの里）	１３	2	4	7
	（菅野学童クラブ）	9	3	1	5
	（笹賀児童センター）	9		4	5
１２	二美町２丁目夏祭り　準備	1			1
１３	ボランティア報告会	1	1		
１４	二美町２丁目夏祭り　参加（④⑤⑥グループ参加）	２１	7	6	8
１５	夏祭り報告・全体まとめ				

［表３］

学習前後での地域についての考え方の変化	３学科	幼保	介護	看護
①いろいろな地域活動が行われていて、地域のつながりが大切だと思った	２４	5	5	１４
②地域のことを知り興味がでてきた、親しみを持った		3	5	3
③地域の活動に参加して楽しかった	１１	1	3	0
④自分も積極的に参加したい	4	1	2	0
⑤協力・連携の大切さ	3	3	0	0
⑥自分と地域の関係	3	0	1	1
⑦その他	2	0	1	1

［表４］

地域の人（笹賀で出会った人たち）についての印象	３学科	幼保	介護	看護
①優しく温かい人たちだった	３６	6	１２	１８
②楽しそうに地域での活動に参加していた	１０	4	2	4
③もっと関わりたい	9	3	0	6
④いろいろな人が居る	2	2	0	0

［表５］

地域で行うボランティア活動についての考え	３学科	幼保	介護	看護
①地域の人がつながりを作る場	１１	4	5	2
②地域づくりにつながる	8	1	2	5
③自分のためになる	8	3	5	0
④参加する人もボランティアもどちらも楽しんでいる	4	1	2	1
⑤課題解決につながる　（子育て・防災）	4	3	1	0
⑥自分も参加したい	4	2	1	1
⑦その他	4	2	0	2

［表６］

専門職をめざしていく上で役立つこと	３学科	幼保	介護	看護
①コミュニケーション能力の向上	２２	1	3	１８
②保育現場で役立つ（保育の幅、子どもと地域のふれあい、地域全体での子育て、地域参加型の行事、防災など）	１８	１０		
介護現場で役立つ（要介護者と地域の関わり、地域包括ケア、施設でのボランティア受け入れなど）			4	
看護現場で役立つ（地域における看護、災害時の協力、イベント開催など）				4
③他職種・地域の人との連携	8	2	3	3
④幅広い年齢層の人たちとの関わり方	5	5	0	0
⑤人との関わりを大切にする	2	1	0	1
⑥その他	3	0	3	0

［表７］

３学科合同で良かった点、改善すべき点	３学科	幼保	介護	看護
＜良かった点＞				
①学科を超えて交流できた	３５	１１	8	１６
②学科の専門を生かした意見を出し合い活動できた	２１	4	7	１０
③人数が集まる	2	2	0	0
＜改善すべき点＞				
①授業運営上の問題　（予定がわかりにくかった、授業外で連絡が取れず打ち合わせができなかった、時間割の位置が悪い、土曜日はスクールバスがなくて登校が大変など）	１６	3	0	１３
②グループ活動上の問題　（もっとほかの班の人とも話したかった、もっと他学科の人といろんな話ができれば良かった、リーダーを決めれば良かった、同じ学科同士はよく話していたが、他学科が加わると話があまりなくなるなど）	１５	7	4	4

５．結果と考察

今回「地域ボランティア演習」として３学科の学生が合同で、短大の立地する笹賀地区のさまざまな福祉活動に参加したことで、地域の人々の地域に対する思いや地域を良くしようとする活動への熱意に触れることができた。そして、立場の違う人たちが協力して楽しみながら行う活動に、短大の学生も一員として受け入れて頂き、ケアスペシャリストを目指すにあたって大きな学びを得たと考える。これは、笹賀地区と本学との交流・連携の積み重ねの結果でもあり、笹賀地区が松本市の中でも住民の地域福祉活動[6]が活発な地域であったからこそ実現したことである。３学科合同「地域ボランティア演習」の成果と課題について３つの視点から論じることとする。

（1）地域ボランティアをとおして学ぶこと —地域の一員として

生活経験の乏しい学生にとっては、地域とは漠然としたなじみの薄いものであり、建学の精神や３学科の教育目標に「地域への貢献」「他職種との連携・協働」を掲げていても、それぞれの専門教育の中で、実践的に地域に触れて学ぶ機会は少ない。幼児保育学科のゼミナール活動、介護福祉学科の訪問介護事業所への実習、看護学科の訪問看護ステーションや保健センターへの実習など専門職の卵として地域住民と接する機会はあるが、地域住民とともに活動できる機会はほとんどない。そういう意味では、ふれあい会食会や夏祭りへの参加は地域の一員として協働できる貴重な体験であった。

この「地域ボランティア演習」の中では、学生が地域活動にふれ、地域に興味を持ち、地域の人々のつながりがとても大切だと学んでいる。そして、自分も地域の中で支えられて生活してきたこと、笹賀地区からも地域の一員として受け入れられていることに気づいている。地域は地図で表す区切りではなく、人々のつながりであり、さまざまな地域活動はつながりを作る場であること、参加する人もボランティアも楽しみ、協力して地域の課題を解決しようとしていることを体験をつうじて学ぶことができたのだと考える。そして、これらの活動に参加することへの意味と楽しさを見いだし、笹賀地区や自分の地域の活動に積極的に参加したいという意欲も生まれている。

「地域ボランティア演習」の活動内容は、笹賀地区内のグループホーム、児童クラブ、児童センターなどへ訪問する活動と、地区内の日赤奉仕団による講義と調理実習、地域住民が主催するふれあい会食会や夏祭りという既存のイベントへの参加というものであり、既存の事業所、機関、団体に活動の場を提供していただいた形である。そういう意味では、ひとりひとりのニーズについて学んだり、事業所・機関が設置された経過や、団体が実施している活動の背景などについては理解不足であったことは否めない。活動の中で地域の人との良い出会いがあり、地域の一員として活動して学べたことは評価できるが、地域の課題やその背景について調査したり、話し合っていくような時間と問題提起が必要であったと考える[7]。これらの活動の体験が導入となり、笹賀地区との交流や活動に深まりが増し、また他地区での活動へも広がることが期待される。

（2）３学科の専門性を活かし合う活動内容

「地域ボランティア演習」の授業の目的は、「実践をつうじて『ケアスペシャリスト』としての自覚を育み、各々の教育課程における専門性を意識する。幼児保育、介護福祉、看護の３学科の協働を通じて、それぞれの領域に対する理解を深め、チームとして地域社会に貢献する。」としている。

自己の専門性の理解

「地域ボランティア演習」は、介護福祉学科と看護学科は１年生前期の選択科目であるため、介護や看護の専門科目で基本姿勢や基本的な知識や技術を習得する時期に、並行して履修したことになる。どの学科も人を対象として関わる専門職、ケアスペシャリストを目指しているため、コミュニケーション力が問われることは、これまで各学科でも強調されてきたことである。今回の活動では、各学科の実習では出会わない健康な小学生、介護を必要としない高齢者、治療を必要としない人などとも接する機会となり、コミュニケーション力を発揮する場面ともなった。また、自分の専門外の幅広い年齢層の人たちと接することは、対象とする人を発達や生活歴の中で捉えて理解することや地域での暮らしを理解することに繋がり、専門職としての力量になると考えられる。

アンケートの中で「専門職を目指す上で役立つこと」については、幼児保育学科２年生からは、園児と地域とのふれあい、地域全体での子育て、地域参加型の行事、防災など具体的なことが挙げられている。やはり、２年生は保育の専門性を理解し、具体的に役立つことがイメージできたと考えられる。

他職種の専門性の理解

活動の準備の話し合いでは、各学科の学んでいることや意見やアイディアを出し合い、「それぞれの専門を活かした話し合いができた」「３学科合同であったためそれぞれの特色を出せて良かった」という回答が大半であった。実際の活動の中で、ひだまりの里訪問では、介護学生が認知症高齢者にわかり

やすいように進行やゲームを行い、保育学生が演奏や歌、紙芝居などを披露した。ふれあい会食会では、看護学生が参加者の血圧測定を行い、介護学生が高齢者の介助や話し相手と体操の指導、保育学生がピアノを弾くなどそれぞれの力を発揮した。夏祭りや児童クラブ、児童センター訪問では、保育学生がゲームなど子どもとの関わりをリードした。得意な分野をそれぞれが担当することで１つの学科では実現できなかったことができ、お互いにその能力を認め合い、工夫する点など学び合うことができたことは、３学科合同授業の大きな成果である。

（3）短大としての成果と課題

３学科交流の一歩に

この授業で同じグループになった他学科の学生同士が授業終了後も話をしたり、食事に行ったりという姿がみられ学生間の交流が継続している。他学科との学生の交流は、自治会活動やサークル活動を通じて行われたりするものであるが、本短大はサークル数があまり多くないため、交流の良いきっかけになったのではないかと考える。この授業が毎年開催されることで、学内の雰囲気も変わるのではないかと考える。

学習内容と授業運営の課題

学習内容に関しては、初めての３学科合同の演習科目であり、予想の３倍の 58 人が履修することになり、受け入れ事業所や機関、団体との調整の中で大幅に予定を変更せざるを得なかった。学科を超えて、9 ～ 10 人ずつの６グループに分け、ふれあい会食会は１・２・３グループ、夏祭りは４・５・６グループが参加することとし、３・４・５回目の内容は、1・2 グループ、3・4 グループ、5・6 グループがそれぞれローテーションで実施した。11 回目は、１グループずつ３か所の活動場所へ訪問し、他の３グループは休みとし、次週に交代とした。このように、履修人数が多いことでグループごとに予定が違い、学生が戸惑った面もあった。担当教員も毎回４人が手分けして、各グループの活動に参加し学生とともに活動した。

また、３学科の共通の１コマを確保するためには５時限目の開講となってしまうが、16 時過ぎからでは活動の場が限られてしまうこと、学外に出かけるには移動の時間や交通手段の確保も難しい。後半は学生が自分たちで企画立案してニーズに合わせた活動を実施することを予定していたが、人数の多さ、学科を超えて授業外に集まることの難しさ、活動先の確保、活動時間帯、交通手段の問題などにより教員側が活動を決めて、振り分けてしまった。このように３学科合同であるからこそ実現した、地域への理解・関心と専門性の自覚、他職種の専門性の理解、地域との協働の体験は、大変意義あるものであったが、３学科合同の選択科目であったための授業運営の制約が大きかったと言わざるを得ない。

しかし、この科目では、３学科合同で地域の人との関わり、地域の一員として大学の地域で行うことを大切にしているため、ある程度のプログラムの提供と指導は必要と考える。このような共通の活動に加えて、来年度は小グループによる自由な活動を企画・実施する内容も取り入れて、学生の企画力や調整力を伸ばして行きたいと考えている。さらに、授業が終了しても履修生有志による自主的なボランティアサークルのようなものが発足すれば、本学の地域交流活動はさらに継続したものになると考える。

そして、この科目での学びと経験を、履修しなかった全学科の学生に伝えるため、ポスター作成・展示や報告会の公開、短大ホームページの活用などの方法を検討していく必要がある。今後、各学科の教育活動の中で、さまざまな形で地域から学ぶ機会を増やすことが望まれる。

「地域ボランティア演習」という科目名

ここまでの授業を振り返ってみると、学生の活動は地域でのボランティアを実施したというより、地域にふれ、地域から学び、ケアスペシャリストへの学びを自覚するものであった。原田（2013）は、「ボランティア活動や地域福祉活動が有する『教育力』は広く認められるが、それ自体がボランティアなのではない。」と述べている。自発的な意志に基づく学習ではなく「学校のカリキュラムのもとで一定の体験活動と学習がノルマとして課せられ、教師らに評価される（原田 2013）」活動は、ボランティア活動の準備学習や専門職への自覚を養うものと考えるべきかも知れない。このことから考えると「地域ボランティア演習」という科目名に、ボランティアという言葉を使うことへの疑問が生じる。「コミュニティサービス」への参加を活用した「サービスラーニング[8)]」という位置づけを検討するべきであろう。

教員の連携

学生からの意見のなかで「普段接することのない他学科の先生とも一緒に活動することができ、アドバイスや感想などがもらえて良かった」という声もあった。４人の教員も授業を共同で運営し、学生とともに活動する中で、互いの学科の教育体制や専門性、相互の考え方などを理解し合うきっかけとなった。この成果を各学科に持ち帰り学科の教育に活かすとともに、短大の３学科の連携・協働のひとつの歩みとしていきたい。

６．結論

幼児保育・介護福祉・看護３学科の合同授業「地域ボランティア演習」の成果と課題は次の５点にまとめられる。

①３学科の学生が地域の一員として地域福祉活動に参加することで、人々のつながりや地域づくりにかける人々の思いや活動の実際を知り、活動に参加することへの意味と楽しさを見いだし、地域の活動に参加したいという意欲が生まれた。さらに、地域課題やその背景を考える学習への発展が望まれる。

②様々な年齢、状況の人たちとの出会いは、ケアスペシャリストとしてのコミュニケーション能力を鍛える場となった。関わりをとおして、専門職として対象とする人を発達や生活歴や地域での暮らしとの関係で理解することが期待できる。

③ともに活動する中で、自分の専門職としての学びを自覚するとともに、他の学科の専門性を認めて協働することができた。この協働は、今後現場での実践で必要とされることであるため、他職種との連携を体感できる機会として意図的に授業を組み立てていく必要がある。

④教員間の連携や地域の事業所・機関・団体との連携・協働をすすめ、さらに学生の専門性や自主性を引き出すための学習内容の工夫が必要である。

⑤ケアスペシャリストを目指す上でプラスとなる豊かな体験を短大全体に波及させる方策を考えていく必要がある。

おわりに

学生からのアンケートに、「人との関わりを大切にすることを学んだ」という回答があった。本学の目指すケアスペシャリストとは、どんな状況のどんな人にも寄り添える対人援助職なのである。この演習をとおして、試行錯誤ではあったが、学生とともに地域から学べたことを感謝し、次年度の授業の充実と研究を進めたい。

ご協力をいただいた笹賀地区の皆様に心から感謝申し上げたい。

引用文献

原田正樹（2013）　福祉教育・ボランティア学習を巡る今日的な状況について
日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要
Vol.21 p. 37-46

注

1　文部科学省により、平成10年度から大学等における学修の成果、ボランティア活動・就業体験（インターンシップ）等の活動に係る学習の成果について単位認定が可能とされた。（学校教育法施行規則第98条第3号平成10年文部省告示41号）
ボランティア活動を取り入れた授業科目を開設する大学は、国公私立あわせて平成8年の72校、平成16年の198校であったが平成23年度 344大学と増加している。（文部科学省調べ）

2　東大阪大学短期大学部では、幼児教育学科1年次生の必修科目として「ボランティアに学ぶ」を開設し保育者の業務を確認することを目的とした実習準備教育と位置づけている。
坂口　伊都　後藤由美　宮本暁美　地域社会に根ざすボランティア演習導入の試み ： 保育士の専門性を高めるために　東大阪大学・東大阪大学短期大学部教育研究紀要 (9)，33-38，2011

3　フェリス女学院大学の「ボランティア単位認定制度」では、学生がボランティアセンターへ計画書を提出して、自主的な活動を行う。活動終了後、記録とレポートを提出してその際に履修登録を行う。評価教員は記録とレポートをもとに丁寧に学生の振り返りを受けとめるといった学生の自主性を保障する形式をとっている。
小笠原公子　ボランティア活動の単位認定の教育的意味（特集　成長の場としての学生ボランティア）大学時報 61(342)，40-45，2012-01 日本私立大学連盟

4　広田（2013）は、「ボランティアへの参加は、通常、自発的なもので、それは『自律した主体による選択的行為』」として想定されるものである。にもかかわらず、ボランティア経験の中でだれかの意図どおりの学習・社会化がなされるとすると、それは、『従属する主体』を作り出すことになる」と述べ、ボランティア経験が教育プログラム化することに危惧をいだいている。
広田照幸「ボランティアを通して学ぶ」ことをどうみるか　日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要 Vol.21 p. 27-36　2013
一方、小笠原（2012前掲論文）は、「ボランティア活動を単位認定すること自体が、ボランティアの主体性、無償性、公益性、先見性を侵害するものではないと考える。（中略）つまり、重要なのは大学が学生にボランティア活動を推奨する目的と理念である。」としている。

5　合津（2013）は介護福祉学生が「地域」について学ぶことの意義として　①利用者との信頼関係構築に役立つ ②利用者のその人らしさを重視した個別ケアにつなげられる ③地域連携のコーディネーターの役割を担う力を養う ④地域包括ケアシステムの一員としての役割を担う力を養う ⑤自分自身が地域の一員として地域を担っていく力を養う の５点を挙げている。その学びを実現させるには地域との連携により実践的に学ぶ機会をもつことと、科目間連携のもとで「地域」に関する教育を組み立てることが課題としている。

合津千香　介護福祉学生が「地域」について学ぶ意義と課題　松本短期大学研究紀要第22号p.25-33 2013

6　合津は、これまで笹賀地区における住民によるさまざまな福祉活動を「ボランティア」ではなく「住民自治に基づく地域福祉活動」と呼んできた（合津千香「住民による小地域福祉活動と地域自治」松本短期大学研究紀要第20号p.9-18 2011)。笹賀地区では「町会活動　＝　福祉活動」と位置づけ、これらの活動は誰がボランティアをする人で誰が受ける人という区別なく、住みよい地域づくりのための住民全体の活動として推進してきた経過があるからである。短大に通勤・通学する教職員と学生は笹賀地区の昼間人口であり、地域住民である。この「地域ボランティア演習」では、地域を構成する一員として３学科の学生がこれらの活動に参画するという結果になった。

7　広田（2013）は、「『ボランティアを通して学ぶ』というのは、下手をすると相互扶助や絆のみに目を奪われてしまい、市民・住民が政治や行政を自らの手で改変していくという側面が欠落しては居ないだろうか」として、ボランティアが個別具体的な関係性だけに満足してしまうことなく、「社会システム」に目をむけることの重要性を述べている。

広田照幸「ボランティアを通して学ぶ」ことをどうみるか　日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要Vol.21 p. 27-36　2013

8　ボランティアとは自発的な活動であり、評価は伴わない。サービスラーニングは教育活動の一環であり、授業としての評価を伴うものである。まだこれらの概念が日本では整理・定着していないことが課題である。サービスラーニングについては、桜井正成「地域活性化ボランティア教育の深化と発展」サービスラーニングの全学的展開を目指して　立命館高等教育研究（7)，21-40，2007-03 に詳しい。